

による測定値を下回った。

【考察】甲状腺機能亢進症に対する放射性ヨード治療の適応は昨今拡大傾向にあり、比較的重量の大きい症例に対しても積極的に行われる様になっている。

シンチグラフィによる体積測定はその二次元的換算方法により、体積の大きい、すなわち甲状腺前後径の大きい症例には不適當であり、その結果として測定値に乖離が生じているものと思われる。超音波による検索は術者の習熟を要するが、放射線被曝もなくまた性状判定も可能であるため体積測定の first choice とし、適宜 CT 検査を追加するのが適當であると考えられた。

PB-42.

CT 検査における移動・撮影時の補助具作成

(霞ヶ浦・放射線部)

○鬼沢 隆一, 甲斐美津江, 保科 全孝,
内山 恵司, 新井 誠, 圓谷 明男
宮内 兼義

(霞ヶ浦・放射線科)

小竹 文雄

【目的】CT 業務において、体位保持が困難な患者の場合、検査の質・効率の低下につながる。また、急患時は複数の検査が必要となり、ベッド間の移動が患者および術者の負担を増大させる。そこで今回、これらの問題点を改善するための補助具を作成し検討を行った。

【補助具作成のコンセプト】

- ・患者・術者双方に負担なく移動できる。
- ・状態に応じた固定が容易にできる。
- ・補助具を全身対応型にすることにより、患者の状態・撮影部位により補助具を変える必要がなく多部位を撮影できる。

【結果】

- ・マットをエンビシート、発泡スチロール、ポリプロピレンシートの三層構造にすることにより救急患者対応時において、血液が付着しても容易に除去でき、移動においても少人数で負担なく行えるようになった。
- ・頭部の撮影時、頭部の固定の高さを3段階に変化させることが出来るため、体型に左右されやす

かった基準線の決定が容易になった。また、枕をフィット感ある構造にし、両サイドにマジックテープを用いることによって十分な固定ができるようになった。

- ・軀幹部撮影時、チェーン付き肘宛てを用いることで長さが調節でき、患者の上肢挙上の状態に合わせた固定が負担なく行えるようになった。

【今後の課題】

- ・軽量化を図った為、全体的に耐久性が悪く改良する必要がある。
- ・全身の固定が出来ないため、マットにもマジックテープを付ける必要がある。

【まとめ】今回の補助具の作成によって、検査時間は短縮し、患者・術者の負担軽減につながった。今後は上記した課題などを改善し、より良い補助具を作成することで運用にバリエーションを加えていきたい。

PB-43.

Gd-DTPA 造影剤投与後の頭部 MRI 検査における静脈のフローアーチファクト軽減についての検討

(霞ヶ浦・放射線部)

○松下 真嘉, 高橋 真美, 新井 元,
新井 誠, 圓谷 明男, 宮内 兼義

(霞ヶ浦・放射線科)

小竹 文雄

【目的】Gd-DTPA 造影剤投与後の頭部 MRI 検査において、横静脈や S 状静脈からのフローアーチファクトが障害陰影となり診断の妨げとなることがある。そこで今回、フローアーチファクトの特徴を把握し、それを減少させるシークエンスの模索を行った。

【使用機器】MRI 装置 Symphony 1.5T (SIEMENS 社製)。

造影剤注入装置 ソニックショット 50 (根本杏林堂社製)。

自作ファントム 1 (水槽の中に内径 5 mm のチューブを挿入)。

自作ファントム 2 (試験管内に希釈倍率を変えた造影剤を封入)。

【方法】1. 自作ファントム 1 を用いて造影剤希釈溶液の濃度・注入速度・シークエンスを変化させ撮像し、フ